

日本組織培養学会

平成3年4月30日

会員通信

第74号

発行所 東京ウエ
行山下鈴菊立イ
貴田田木川都予
任堅隆利忠品防
者一夫光裕川衛
郎（北福聖上研ケ
（国里島マ大究所
立大県リア2-10-35
予学立ア）部
研）医ナ医大）内線322

§ 日本組織培養学会平成2年度第3回幹事会議事録

日時：平成3年3月21日（木）午後3時～7時

場所：麻布大学 本館2階第一会議室

出席者：黒田行昭（会長）、今西二郎、岩田邦男、川原 大、下田隆夫、永森静志、
西 義介、星 宏良、山田堅一郎、（以上幹事）、梅田 誠、乾 直道（会計
補佐）、松村外志張（細胞工学委員会委員）

I. 報告事項

1. 会長報告（黒田会長）

1) 日本学術会議から第15期会員（細胞生物学）の日本組織培養学会からの候補者および推薦人、推薦人予備者の選考、指名の依頼がありました。これらにつきまして幹事の方々にお諮りした結果、第15期会員候補者として東京大学名誉教授山田正篤博士を推薦しました。また、推薦人として黒田会長を、推薦人予備者として高木良三郎大分医大教授を指名しました。

2) 日米合同組織培養学会（1991 World Congress on Cell and Tissue Culture）が平成3年6月15日（土）～20日（木）、米国カリフォルニア州アナハイムで開催され、日本からも77名の講演者を含め、多数の研究者が参加するとの情報がアメリカのハーバード大学のBruse R. Zetter教授から連絡がありました。また、ヨーロッパ等の参加者を含め、大会参加者は1200～1500名に達するだろうとのことです。なお、植物組織培養についてのセッション・イン・デプスなどもかなりあることから日本植物組織培養学会関係者にも参加をよびかけました。

2. 庶務報告（今西幹事）

平成2年10月より本年3月までの下記の庶務報告と同期間における新入会員および退会者に関する報告が行われました。なお、新入会員と退会者名は会員通信に掲載される予定です。

1) 11月末に（社）日本工業教育協会より「社会人技術者再教育に関する調査について」のアンケート調査依頼があり、学会会員数と社会人を対象とした講座開催は行っていないがシンポジウムを行っている旨を返答しました。

2) 「日本宇宙生物科学第5回大会」協賛の依頼があり、黒田会長より協賛する旨の連絡をしました。

3) 島津科学技術振興財団より「平成3年度功労者表彰の候補者推薦について」と

「研究開発助成及び海外研修研究援助の公募記事掲載依頼」に関する書類が送付されました。前者については会長に、後者については山田会員通信幹事に書類を送付し、会員通信第74号に掲載をお願い致しました。両者の申請書類は岩田庶務幹事が保管しています。なお、申込切は両者とも9月末です。

4) 複写権委託の再度の要望が学協会著作権協議会よりありました。本件については後の協議で本年秋までに編集委員会で結論を出すことしました。

5) 以下の書類および情報もたらされましたが会員への伝達手段がないため岩田庶務幹事のところで処理あるいは保存しています。

1. 「International Symposium on Tropical Crop Research and Biotechnology」のアナウンスが送付されましたがすでに申込期日を過ぎていたため特段の配慮は行ないませんでした。

2. 「医学の歩み」より91年度学会案内、週刊医学会新聞第1927号（日本医学会総会特集）、「Medical Pocket Diary '91」が送付されました。

3. 第64回科学技術情報流通技術基準（S I S T）普及説明会に関する協力依頼：関東地区（開催日：3月1日）

4. 「Biotechnology : Technical, Economical and Commercial Infomation」という会社より「Biotech」というデータベースの購入案内が送付されました。

5. (株)オービス、(株)ライフサイエンス・メディカより「Association Infomation of Respirology」（国内発表の呼吸器関係の論文の抄録集で季刊）の第1巻第3号の寄贈を受けました。

6. 島津科学技術振興財団より「平成元年度事業報告書」と「第10回研究開発助成金及び島津賞に関する冊子」が送付されました。

6) 平成2年5月から3月までの会員変動について

新入会員：正会員19名、賛助会員1社

退会者：正会員11名、賛助会員1社

3月21日現在の会員数：正会員718名、賛助会員63社

3. 会計報告（西幹事）

平成2年度決算の見込みを報告しました。本来は総会で承認を受けることが必要ですが、本年の大会が平成2年度中に開催されるため承認は会員通信に決算報告を掲載した上で求めることにしました。平成3年度予算を提示しました。その中で一般会計の収入の硬直化が指摘されました。前回の幹事会で提案された広告の一元管理についてのアンケート結果を報告しました。

4. 渉外報告（星幹事）

IACCへの加盟費（2ドル×600人＝1200ドル）の納入しました。通信に用いる英文レター用紙が出来たことを報告しました。

5. 奨励賞推薦報告（永森幹事）

平成3年度、第5回の日本組織培養学会奨励賞として3名の候補者が推薦された。これらの候補者について3月21日麻布大学において選考委員会が開かれ審議された結果、東京大学医科学研究所癌細胞研究部の柴沼質子会員の発表演題「活性酸素による細胞増殖制御（第62回大会、横浜にて発表）が奨励賞候補者として適当である

との結論が得られ、幹事会の承認を経て総会において授与式を行うこととなりました。

6. 会員通信報告（山田幹事）

会員通信73号が平成2年12月20日に発行しました。次の74号は本年の大会終了後の予定です。

7. 各委員会報告

a. 編集委員会報告（星委員長代理）

1月18日に編集委員会が開催され、以下の事項が論議の上決定されました。

- 1) 「組織培養研究」の表紙の様式を決定したこと。
- 2) 「組織培養研究」が論文誌として成立することの前提条件として投稿論文の審査を厳密にするため、25名の審査委員を委嘱したこと。
- 3) 次回発行の「組織培養研究」に審査されたoriginal論文が5報、invited論文が1報掲載されること。
- 4) 「組織培養研究」第10巻2号より編集事務局を横浜市立大渡辺正己会員から山形市の機能性ペプチド研究所の星宏良院長代理へ移管する予定であること。

b. 細胞バンク委員会（星委員長）

細胞バンク委員会で作成した各関連省庁への提出を希望している「わが国における培養細胞の保存供給体制整備に関する要望書（案）」に対して2月22日現在25の学会より賛同の返事をもらっています。今年5月に各省庁大臣官房あて提出する予定です。

c. 細胞工学委員会（松村委員）

- 1) 昨年10月の細胞工学シンポジウムが多くの参加者をえて成功のうちに開催されました。本年の秋のシンポジウムも開催する予定ですが学会の秋季シンポジウムの開催地の決定を見て開催場所を決める方針です。なお、将来的には特別なシンポジウムは行わないで、大会の中で講演発表していけるようにしたいと考えています。
- 2) 現在、委員会委員のうち、企業から参加して下さっている方々の中に転勤や仕事内容の変化により委員会活動が困難になってきている方がおられ、委員会活動で一部の委員の負担が増加しています。その負担解消のため、委員の追加を希望しています。今後の対応については再度委員会で検討の上、幹事会に諮ることになりました。

d. 教育システム委員会（梅田委員長）

日本組織培養学会編集の「細胞トキシコロジー試験法」が5月末から6月頃、「組織培養とバイオサイエンス」が6月末頃朝倉書店より発刊される予定です。また、「細胞成長因子 パート3」を編集したい意向があります。

協議事項

1. 第65回大会について

平成4年度の第65回大会の開催場所・世話人など種々検討され、山形市の機能性ペプチド研究所（及川胤昭常務取締役）の星宏良会員にお世話いただくことが了承され

ました。これを総会に提案して承認を受けることになりました。来年5月の第3週か、6月の第1週、サクランボの季節に山形県立図書館（遊学館）で開催を予定しています。

2. 第6回秋季シンポジウムについて

現在のところ内諾を受けた開催場所はなく、いくつかの候補について会長、幹事等からお願いした上で決定することになりました。

3. 機関誌について

以前より懸案となっている「組織培養研究」の年4回の発行についてと学会機関誌としての位置づけを明確にしていくことが論議されました。そのためには予算的措置と投稿論文をいかに増やすかが問題であることが指摘されました。今後、会費の値上げや広告収入の年間契約、投稿論文としてrapid communicationやshort communicationの形式も取り入れていく等が提案され、それに向けた作業を編集委員会および幹事で進め、来年の大会には明確な実施案を提案できるよう努力することを結論としました。

§ 日本組織培養学会平成3年度総会議事録

日 時：平成3年3月23日（土）午後1時～2時

場 所：麻布大学 大教室

司 会：今西庶務幹事

I. 議長選出

山田正篤東京大学名誉教授が選出されました。

II. 第64回大会世話人挨拶

黒田行昭世話人より大会内容の紹介、開催に関して多大の援助を麻布大学より受けたことに対する感謝の意および悪天候の中を参集された参加者への感謝の意が表明されました。

III. 報告事項

1. 会長報告（黒田会長）

日本学術会議第15期会員（細胞生物学）の日本組織培養学会からの候補者について幹事会の承認を得て、東京大学名誉教授山田正篤先生を推薦しました。また、推薦委員として黒田会長を、推薦人予備者として高木良三郎大分医大教授をそれぞれ幹事会の承認を得て指名しました。

2. 庶務報告（今西幹事）

平成2年5月より本年3月までの新入会員の紹介をし、現時点において正会員数は718名、賛助会員数は63社となりました。

3. 会計報告（西幹事）

平成2年度決算の見込みを報告しました。本来は総会で承認を受けることが必要ですが、本年の大会が平成2年度中に開催されましたので承認は会員通信に決算報告を掲載した上で求めることを提案し、承認されました。また、平成3年度予算を提示し、承認されました。

4. 渉外報告（星幹事）

IACCへの加盟費（2ドル×600人＝1200ドル）を納入しました。通信に用いる英文レター用紙が出来ました。

5. 奨励賞推薦報告（川原幹事）

奨励賞選考委員会で平成4年度奨励賞は東京大学医科学研究所の柴沼質子さんが推薦され、幹事会で承認されました。なお、総会終了後表彰式が行われました。

6. 会員通信報告（山田幹事）

会員通信73号が平成2年12月20日に発行されました。また、平成2年度分として本大会終了後74号を発行する予定であります。

7. 各委員会報告

a. 編集委員会報告（高木委員長）

本年度3回編集委員会を開催し、以下の事項を論議の上確認しました。

- 1) 「組織培養研究」の表紙の様式とシンボルマークを決定した。
- 2) 「組織培養研究」を年4回発行したい。そのため論文の積極的な投稿を希望

する。また、投稿論文の公平な審査のため、25名の審査員を委嘱した。

- 3) 「組織培養研究」発行費を学会費で賄うよう希望する。
- 4) 「組織培養研究」第10巻2号より編集事務局を横浜市立大大渡正己会員から山形市の機能性ペプチド研究所の星宏良会員へ移管する予定である。

b. 細胞バンク委員会（星委員長）

- 1) 細胞バンク委員会で作成した各関連省庁への提出を希望している「わが国における培養細胞の保存供給体制整備に関する要望書（案）」に対して2月22日現在25の学会より賛同の返事もらっています。今年5月に各省庁大臣官房あてに提出する予定です。
- 2) 「組織培養研究」supplement 発行しました。
- 3) 文部省科研費により各細胞バンク間の「data base」統一作業が進行しています。

c. 細胞工学委員会（松村委員）

昨年11月7、8日第2回細胞工学シンポジウムが200名以上の参加者を得て成功のうちに開催されました。本年の秋のシンポジウムも開催する予定ですが学会の秋季シンポジウムの開催地の決定を見て開催場所を決めたいと考えています。

d. 教育システム委員会（梅田委員長）

日本組織培養学会編集の「細胞トキシコロジー試験法」が5月末から6月頃、「組織培養とバイオサイエンス」が6月末頃発刊される予定です。また、「細胞成長因子 パート3」を編集する予定です。

IV. 協議事項

1. 第65回大会について

黒田会長より山形市の機能性ペプチド研究所・及川胤昭常務取締役所長に主催していただくことが提案され、承認されました。

機能性ペプチド研究所の星宏良会員より第65回大会の開催を引き受けるにあたって

- 1) 機能性ペプチド研究所とその母胎である発生生殖生物学研究所との共催で行うとのこと
- 2) 代表世話人として機能性ペプチド研究所所長及川胤昭博士、事務局長として星宏良会員がお引受けくださるとのこと
- 3) 開催時期としては平成4年5月末から6月初めを考えており、開催場所は山形市内の山形県立図書館「遊学館」を考えていること

が示されました。

2. 第6回秋季シンポジウムについて（黒田会長）

現在のところ内諾を受けた開催場所はなく、いくつかの候補について会長、幹事等からお願いした上で決定し、会員通信で会員へ連絡したいとの提案がなされました。

3. 日米合同組織培養学会について（黒田会長）

日米合同組織培養学会が「1991 World Congress on Cell and Tissue Culture」として開催されます。これは平成3年6月15日（土）～20日（木）、米国カリフォ

ルニア州アナハイムで開催され、日本からも多数の研究者がシンポジウムやセッション・イン・デプス、ワークショップに参加、講演される予定です。

4. 機関誌「組織培養研究」について（編集委員会）

以前より懸案となっている「組織培養研究」の年4回の発行についてと学術誌としての位置づけを明確にしていくことが表明されました。そのためには会費の値上げを含めた予算措置を考慮する必要性が指摘されました。なお、年4回の発行が恒常的になれば文部省からの出版補助を受けることができることも示されました。

以上

§ 第64回大会を終えて

黒 田 行 昭
(麻布大学 生物科学総合研究所)

寒の戻りか、冷雨のそば降る春の彼岸、前線が本州南岸に停滞し、連日の雨続きの中を第64回大会を、3月22日（金）～24日（日）麻布大学キャンパスで開催しました。本年は6月に日本とアメリカの組織培養学会が合同で、カリフォルニア州のアナハイムで“1991 World Congress on Cell and Tissue Culture”を開催することがまじりましたが、それには参加されない大多数の会員のために、本年は例年の5月または6月よりも少し早めて、3月下旬に第64回大会を開催することに致しました。

大会の準備

大会開催日に連動して、講演の申込みも早くなり、1月16日、まだお正月気分も抜けきらない頃で、申込み件数も出足悪く、やきもきいたしました。何しろ私が昨年3月に国立遺伝学研究所を停年退官し、4月に赴任したばかりの麻布大学キャンパスで学会を開催することにしたものですから、麻布大学では、これまでこのような全国規模の学会を開催したことがなく、また学会員も私を含めて3名、最初の間は勝手が分からずとまどいばかりでした。3月に入ると大学は春休みになりますので、教室や体育館が会場として使用できることと、4月に入ると本年は京都で医学会総会が始まるので、それと重ならないようにとということで、3月22日（金）～24日（日）という会期を決定しました。

実際の準備に入ったのは昨年7月、まず準備のための組織委員会を発足させ、会場の設定、特別講演の依頼やシンポジウム、ワークショップのテーマやオーガナイザー、講演者の依頼、会社、企業への展示、広告などの依頼、ホテル・旅館の調査、リスト作成など、また年が明けてからはプログラムや講演抄録集の印刷、講演者への発表日時の通知、展示会場の設定業者や懇親会の催し物の依頼など目の廻るような忙しさでした。

特別講演

特別講演をお願いしたシカゴ大学のA. A. Moscona 教授は、私がNIHのPostdoctoral Research Fellow 時の恩師で、Dulbecco (1952) と並んでトリプシンによる細胞解離法を初めて開発した人 (Moscona and Moscona, 1952) で、また解離細胞から旋回培養法によって再現性の高い定量性のある組織再構成法を初めて開発し (Moscona, 1957)、国際発生生物学会会長も歴任され、アメリカの科学アカデミー会員でもあります。昨年8月のイラクによるクエート侵攻以来の湾岸戦争の不安な世界情勢のもとで、来日が危ぶまれていましたが、幸い3月に入って戦争も多国籍軍の勝利のもとに無事終結し、来日が実現しました。

Moscona 教授の講演は、大変分りやすい英語とスライドで、組織の中の細胞の分化と細胞からの組織構築のしくみ、とくに細胞間接着によって、遺伝子発現が制御されるなど、現状と将来に向けての細胞分化の研究の進展を示唆した興味深い講演でした。もう1名の特別講演は、組織培養記念研究所の高岡聡子博士で、皆様ご存知のように、高岡博士は東大・医科研で、故勝田 甫教授のもとで40年間にわたって組織培養一すじに生きてこられ、培養技法の名人ともいえる人です。組織培養も、最近では既成の培養液や血清を使用して、使い捨てのシャーレやフラスコ、ピペットなどを使って、何でも手軽に実施できる時代にはなりましたが、それだけ細胞を物として取扱い、培養や処理なども機械的になり勝ちであり、細胞は生きて培養環境に対応して種々の様相を呈するという細胞の本質を見失う傾向がみられます。高岡博士の“生きつづける培養細胞”の講演は、このような風潮に頂門の一針を投げかけ、とくに若い研究者の方々にとっては深い感銘を与えるものでした。

シンポジウムとワークショップ

シンポジウムでは、宇宙時代を迎えた人類が、宇宙空間で遭遇する重力や磁力、温度その他種々の要因になる影響について、培養細胞を用いて行われている研究を取扱った「宇宙生物学と組織培養」、現在、細胞培養が主流を占める中で、細胞と個体全体とのギャップを埋めるものとしての「哺乳類の全胎培養」、また、最近脳死の問題や臓器移植でマスコミを賑わしている移植組織の免疫や拒絶反応の問題を解決する方法として、健康な時に自己の細胞を増殖させて凍結しておき、必要に応じてこれをもとの体に戻して治療する「組織・細胞の移植」についてシンポジウムが行われました。

また、無脊椎動物の昆虫を用いて、分子生物学などの学問分野に利用するとともに、ウイルスの産生や抗微生物物質の生産や制癌剤検定など利用面について討議する「昆虫の培養細胞の利用」、組織を形成する細胞パターン形成のしくみ、これを遺伝的、理論生物学的な解析の面から取扱う「多細胞形態のパターン形成」などについて、シンポジウムが行われ、興味ある講演発表と、それに対する活発な討議が行われました。

ワークショップとしては、本学会の細胞バンク委員会の企画で、「培養液の標準化—MEMのJIS規格策定を契機に」を取上げ、培養液の標準化、製品化、検定法、品質価値など多数の問題点について突込んだ討議がなされました。細胞培養に最も多く使用

されるEagleのMEMについても、これだけ多くの問題点があり、標準化のむづかしさを改めて浮彫りにしました。

このような培養のための材料や技術などは培養学会でしか取扱えない問題であり、組織培養の技法が医学、生物学、農学などあらゆるライフサイエンスの分野に広く利用されている今日、このような材料や技術的な面の検討も今後、本学会として続けてゆくことの大切さを痛感いたしました。

展示会と懇親会

展示会場では展示（ポスター）講演と、企業や会社の商品展示を行いました。講演会場を出て、大学のキャンパスを少し歩いての展示会場は、休憩や自由な談話と交流の場になり、講演会場での緊張した雰囲気息抜きとくつろぎの場となったのではないのでしょうか。

懇親会には、麻布大学学生の吹奏楽の演奏と、麻布大学中村経紀学長や相模原市長館盛静光氏、A. A. Moscona教授、生物科学総合研究所田淵清所長などの挨拶や祝辞、山根績東北大学名誉教授の乾杯の音頭で始まり、最後は郷土芸能としての相模龍王太鼓の力強い演奏があり、保存会の若い女性のキビキビとした動作や打鳴らす太鼓の激しいバチさばきは、参加者を魅了し、強い印象を残しました。

来年度の大会は山形市の機能性ペプチド研究所の星宏良会員のお世話で、みちのくの山形市で開催される予定ですが、その時にはまた新しい観点からの新しい展開を期待しております。

§ 細胞バンク委員会平成2年度第2回議事録

日 時：平成2年11月6日（火曜日） 1時から3時

場 所：大宮ソニックシティ、会議室 703号室

出席者：黒田行昭、星 宏良、梅田 誠、工藤俊雄、佐藤敬喜、竹内昌男、宮崎正博
（難波正義代理）、松村外志張、水沢 博

1. 前回第1回会議議事録が承認されました。
2. 前回会議の結果、細胞バンク委員会規約が大野委員によって作成され、郵送で各委員に回覧されており承認されました。
3. 細胞バンクの充実を図るために、関係各省庁あるいは他学会へアピールを提出することで、以前より準備が進められてきました。内容を最終的に検討し、アピール文の最終文案が承認されました。また、政府機関への働きかけとしては、関係している複数の省庁へ宛てて提出することで承認されました。

4. 細胞バンクに関する各種の議論については、関連する微生物保存連盟へ学会として加盟し積極的な交流を行なう必要があるのではないかとの見地から、星委員長が連絡をとりましたが、学会として加盟するには保存連盟の規約改正が必要であるのですぐには出来ないとのことでした。しかし、お互いに関連していることは重要であるとのことから、今後密接に連絡をとりあいたいということで合意したことが、星委員長から報告されました。

5. データベースの作成についての進行状況が、水沢 博委員から報告されました。JCRB細胞バンク、理研細胞バンクのデータが既に統合されてデータの修正を行いつつあります。東北大学細胞バンクと醸酵研究所細胞バンクでは現在データ入力を進めているので、終了次第全体を統一する予定です。

6. データベースが完成した段階で、書籍として出版するのはどうかという意見が提出されましたが、梅田委員が朝倉書店の意見を聞き、出版費用などについて調査しました。文部省からの補助が得られたとして、1冊 3,500円から 4,500円ぐらいになるだろうということでした。

実際にデータベースが出版に値するものかどうかについては12月末までにデータ入力をひととおり終わらせる予定なのでその時点で内容を公開するので、それを見たくて各委員の承認を得て決定したいとの補足意見が水沢委員からありました。

7. 細胞株品質管理の方法について、DNAフィンガープリント法を導入することについて、JCRBバンクの水沢委員から提案がありました。方法については論文を投稿中とのことで、参考の図とアブストラクトが紹介されました。

8. 細胞所有権、倫理上の問題について松村外志張委員から説明がありました。

現在、培養細胞株を研究に利用するうえでの倫理問題については積極的に触れられてこなかったことから、生産材料としてヒト細胞株を使用するという点については触れることにためらいが多かった。しかし、いつまでもこの状態で問題を先送りすることは許されないと考えられる。

松村委員の所属する研究所では所内に倫理委員会を作り問題を検討しているので、その一部が紹介されました。

医療に携わる医師の方、サンプルの提供者などの意見を参考に以下のような論点が紹介されました。

a. 各個別の研究機関でそれぞれ倫理委員会を設置する必要性が指摘される。

b. 従来広く使われてきた細胞株とこれから新たにヒトから採取して使う細胞とは区別する必要がある。これまでに樹立されたものについては過去の習慣を尊重する必要があるだろう。

- c. 基本的にボランティアの提供者から研究に利用することに合意して採取すべきである。
- d. 提供された細胞から経済的利益が発生した場合の所有権の問題については、採取後の研究費の投入などの問題を考えれば、細胞を提供したボランティアに所有権が存在すると考えるには無理があり、研究者あるいはその所属機関に所有権があるというのが最近の一般的な合意点と考えてよいだろう。
- e. 倫理問題についてはいつまでもタブー視するべきではない。

次回会議 : 1991年3月22日前後

§ 公募記事

平成3年2月19日

日本組織培養学会
会長 黒田行昭 殿

〒604 京都市中京区河原町通二条下ル
一ノ船入町 378番地
財団法人 島津科学技術振興財団
理事長 岡本道雄

財団法人 島津科学技術振興財団による研究開発助成
および海外研修研究援助（研究集会出席および留学）の公募記事掲載依頼

拝啓 早春の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、当財団の平成3年度の題記事業につきまして、貴会の会誌にぜひ添付の公募記事を掲載いただきたく、お願い申し上げます。当財団としては、貴会ご関係の研究者の方々に少しでもお役に立てればと、念願いたしておりますので、何卒宜しくお取り計らいください。

末筆ながら、貴会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

敬 具

島津科学技術振興財団による
平成3年度研究開発助成応募要綱

1. 助成の対象

科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究を対象とする。ただし、助成対象者は原則として45才以下とする。

2. 助成の内容

上記研究に対し、助成金を交付する。

援助金総額：2,200万円 1件につき250万円ないし100万円

3. 応募の方法

当財団所定の研究開発助成申込用紙に必要事項を記入して、当財団に直接申し込む。申込締切は9月30日とする。

4. 選考審査の方法

当財団に設置する選考委員会が選考し、理事会が審議し決定する。

5. 交付の方法

平成4年2月(予定)に開く贈呈式において助成金を交付する。

6. 連絡先 : 平成3年2月末まで現住所

財団法人 島津科学技術振興財団

〒604 京都市中京区河原町通二条下ル一ノ船入町 378番地

電話 (075)256-5533

平成3年3月以降

〒604 京都市中京区西ノ京下合町11番地

電話 (075)823-3240

以上

§ 編集後記

- 第64回大会は黒田行昭会長並びに関係者一同の御尽力により、相模之国、麻布大学のキャンパスを舞台にして盛大に行われ、無事終了しました。懇親会での龍王太鼓に鼓舞され、学会も活発な討論が繰り広げられました。関係者の皆様方に感謝致します。
- 次回大会は陸奥国、山形で開催されます。会員の皆様方と“紅花の里”で再会出来ることを願っています。
- 第5回学会奨励賞は柴沼質子（東大・医科研）会員に贈られました。今後の一層の研究の御発展を期待致します。
- 学会誌「組織培養研究」の年4回の発行を目指して編集委員会の方々が尽力されています。会費値上げ案も検討中。会員の皆様方の御意見を御投稿下さい。

山笑う 祝い太鼓の みだれ打ち

§ 新入会員

〔正会員〕

氏名	現住所	所属機関・所在地
薄金真雄	*〒565 吹田市山田西4-4-14-612 ☎06-877-2821	大阪大学微生物病研究所外科 〒565 吹田市山田丘 3-1 ☎06-877-5121
岸邦和	〒206 多摩市豊ヶ丘 2-5-3-404 ☎0423-76-0751	杏林大学保険学部 *〒192 八王子市宮下町 476 ☎0426-91-0011
田中貴代子	〒170 豊島区巢鴨 5-20-15 ☎03-3918-7445	臨床医学総合研究所 *〒113 文京区本駒込 3-18-22 ☎03-3823-2101
野田直子	〒870 大分市北下郡 8組 ☎0975-69-1024	大分医科大学内科学講座第一 *〒879-56大分県大分郡挾間町医大ヶ丘 1-1 ☎0975-49-4411
細井伸二	〒194 町田市中町 3-69-13, B-103 ☎0427-32-8527	協和発酵工業(株)東京研究所 *〒194 町田市旭町 3-6-6 ☎0427-25-2555
森本道雄	〒600 京都市下京区中堂寺坊城町 3-1 シャトル五条 802 ☎075-344-1626	京都府立医科大学第三内科学教室 *〒602 京都市上京区河原町通広小路上ル 梶井町 465 ☎075-251-5519
山下均	〒359 所沢市並木 3-2 防衛医科大学 学校所沢宿舍5-103 ☎0429-94-3754	防衛医科大学衛生学 *〒359 所沢市並木 3-2 ☎0429-95-1211
山田則子	〒174 板橋区前野町 6-10-1-601 ☎03-3965-9629	東京女子医科大学医用工学研究施設 *〒162 新宿区河田町 8-1 ☎03-3353-8111

〔賛助会員〕

機関名	所在地
オリンパス光学工業(株)第二事業部染色体研究センタ	〒192 八王子市久保山町 2-3 ☎0426-91-7111

§ 住所変更

氏名	現住所	所属機関・所在地
石川正洋	*〒189 東村山市秋津町 4-34-42-206	(株)科薬薬理センター
太田博明	〒164 中野区中野 3-43-10-302 ☎03-3380-0428	慶応義塾大学医学部産婦人科学教室 *〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-3353-1211
鎌田正晴	〒770 徳島市南矢三町 3-3 ☎0886-31-4669	徳島大学医学部産婦人科 *〒770 徳島市蔵本町 2-50
北澤利記	〒678-02赤穂市加里屋 102-6	アース製薬(株)生物科学研究所細胞工学 *研究室 〒678-02 赤穂市西浜北町 1122-73 ☎07914-3-4333
小浦雅敏		ライフテックオリエンタル(株) *〒103 中央区日本橋小伝馬町 14-41 ランディック第3日本橋ビル
須藤鎮世	〒248 鎌倉市西鎌倉 2-13-9 ☎0467-31-8167	伊藤ハム(株)中央研究所 *〒302-01茨城県北相馬郡守谷町久保ヶ丘 1-2 ☎02974-5-6311
星宏良	〒990 山形市城西町 5-10-5 ☎0236-43-7947	(株)機能性ペプチド研究所 *〒990 山形市城西町 5-34-5 ☎0236-43-3668
堀口貞由	*〒233 横浜市港南区下永谷 4-1-9-402	旭化成工業(株)医薬事業部 〒100 千代田区内幸町 1-1-1 インペリアルタワー14F
村田長芳		鹿児島大学医学部第二解剖学教室 *〒890 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1 ☎0992-64-2211
守谷宏毅	〒228 相模原市旭町 24-25-414 ☎0427-41-7663	住友金属工業(株)バイオメディカル部 *バイオ開発室 〒229 相模原市大沼 3392 ☎0427-51-7568
吉原忠志	〒277 柏市東 2-2-2-5 ☎0471-63-6055	伊藤ハム(株)中央研究所 *〒302-01茨城県北相馬郡守谷町久保ヶ丘 1-2 ☎02974-5-6311

